

肥前島原松平文庫蔵「長久手合戦図」に描かれた戦場の地理

米家 泰作

1. はじめに

中世末から近世初頭の日本では、たびたび戦争（合戦）が行われ、それを描いた絵図（合戦図）が各地に伝わっている。こうした合戦図には、鳥瞰の視点から絵画的に描かれたものもあれば、より平面的な地図として作成されたものもある。また、軍功を記録するため戦争直後に作成されたものもあれば、かなり後の世代が復原的に描いたものもある。いずれも、歴史地理学の観点からみれば、近世の武士たちが戦場の地理を記録し、そしてそれを参照してきたことを示す資料であり、「歴史／地理的表象」（米家 2005）の例として捉えることができる。

羽賀祥二（1998）が尾張藩を例として論じたように、近世の半ばには古戦場を史蹟として整備し、顕彰する営みがみられた。それに伴って、古戦場の歴史地理を地図上に復原する試みもなされた。その典型例の一つが、天正 12（1584）年 3 月～11 月に織田信雄・徳川家康の連合軍が羽柴（豊臣）秀吉と戦った「小牧・長久手の戦い」である。その主戦場は尾張藩域と重なり、また同藩の父祖・家康が秀吉に勝利したという点で、尾張藩にとっては顕彰すべき重要な史実であった。とりわけ、一連の小牧・長久手の戦いのうち、家康が勝利をおさめた 4 月 9 日の長久手の戦いに関しては、史蹟の整備と訪問や、地誌での言及、ならびに絵図や紀行文の作成が、17 世紀の末から進んだ（羽賀 1998：39-44；谷口 2006）。『長久手町史』収録の合戦図屏風や古地図は、こうした営みの一環として理解できる（長久手町史編さん委員会 1981, 2003）。後者の古地図、すなわち寛政 5（1793）年の「尾州愛知郡長久之邑」絵図と天保 11（1840）年の「長湫古戦場之図」は、尾張藩士や幕臣が作成・筆写に関わったとみられ、古戦場への来訪者はこうした合戦図を目にしたと考えられる。

筆者は今回、島原市を訪問するにあたり、旧島原藩の「肥前島原松平文庫」に、関ヶ原の戦いなどの合戦図が 19 点含まれており、そのうち 1 点が「長久手合戦図」（資料番号 72-25）であることに興味をいだいた（島原市教育委員会・肥前島原松平文庫 2018：302-303）。島原藩の藩主・松平氏は、徳川家の祖の松平氏から 15 世紀後半に分かれた流れ（深溝松平氏）とされる。16 世紀末の当主・松平家忠は、徳川家康の家臣として小牧・長久手の戦いに従軍し、そのことを自らの日記（『家忠日記』）にも記した。その意味で、肥前島原松平文庫に「長久手合戦図」が含まれているのは、徳川家の譜代という松平氏の立場と無関係ではないと考えられる。今回、幸いにも島原図書館で同図を閲覧する機会を得たので、ここで史料紹介を行うとともに、『長久手町史』所収の地図との比較を念頭において、その特徴について考察したい。

2. 「長久手合戦図」の書誌的概要

図1に「長久手合戦図」の全体写真を示した。資料本体に外題・内題はなく、裏面にも文字の記載は無い。肥前島原文庫における資料名は「長久手合戦図 控」(以下、本図と呼ぶ)であり、写本(控え図)であることを示唆している。なお本図の内容は小牧地域を含み、尾張国内外に及ぶ「小牧・長久手の戦い」の全容を捉えたもので、その一部である長久手の戦いに限定したものではない。その意味で、現在の用語としては「小牧・長久手合戦図」と称するのが適当であるのかもしれないが、近世においては、小牧・長久手の戦い全体を指して「長久手合戦」と呼ぶことは珍しくなかった。

本図の成立年代や作成者は明記されていない。図の右端には「天正十二年甲申三月」とあるが、これは小牧・長久手の戦いが始まった年月である。図の内容はその翌月以降の戦いを含み、天正19(1591)年以降の秀吉の称号「太閤」の表記もみられる。ただし、手がかりになる記述として、右下隅の「かにゑ」(蟹江)に付された記述(後掲の図2のG)が注目される。

G…かにゑの城主前田与十郎、逆心仕、いとこの瀧川引入申候。其時ノ御一戦大事ニ、水野日向守手を負申候。我等父討死仕候。瀧川ハ和議仕罷退、前田ハ切腹也。

(句読点は筆者加筆。以下同様)

これは、小牧・長久手の戦いが膠着状態におちいるなか、天正12年6月16日から始まった蟹江合戦の経過を記したものである。すなわち、羽柴方の瀧川一益が蟹江城を攻め、城主(前田長定)を内応させたものの、織田・徳川軍が救援に急行し、翌7月3日に城を奪還した経緯を示している。ここに「我等父討死」とあるのが、本図の作成者の父を示すと思われるが、それが誰に当たるのかは明確でない。その前文で、徳川秀忠の乳兄弟であった水野勝成(日向守、後に備後福山藩主)に触れていることから、勝成の家臣であった可能性が考えられる。また、この蟹江城の合戦には、島原藩の父祖となる松平家忠も参加していること

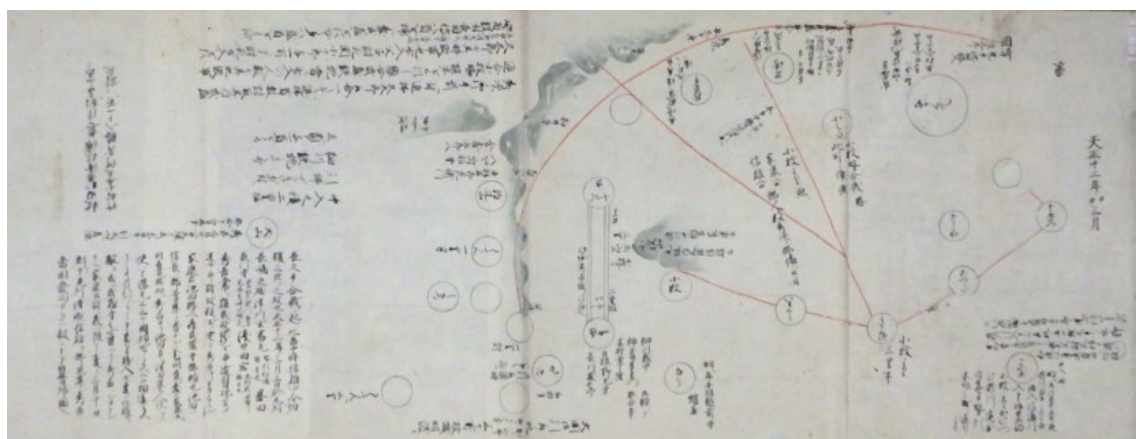


図1 肥前島原文庫所蔵「長久手合戦図」

38.3cm×110.5cm。肥前島原文庫の許可を得て掲載。

から、松平家の家臣である可能性もないわけでない。ただし本図においては、蟹江城の合戦に限らず、家忠の従軍や戦功については特に記すところないため、もともと本図が松平家の家中で成立したとも考えにくい。いずれにしても、徳川軍に従う武士で、蟹江合戦で戦死した人物の子が、本図を作成したと考えられる。

この解釈が当たっているならば、もともと本図が成立したのは16世紀末年から17世紀前半にかけてと想定されるが、紙質の印象では合戦直後の筆写とは考えにくい。図中には地名を示す円が空白になっている箇所が散見され、また後述のように誤記と思われる記載があることは、筆写の際に、筆写した人物が原図を十分に読み取れなかったことを反映しているように思われる。仮に、水野勝成にかかわる人物が本図の成立に関与していたとすれば、勝成の弟・水野忠清が元和2(1616)年に三河国刈谷藩主となり、寛永9(1632)年に同国吉田藩に移封されると、代わって松平家忠の孫・松平忠房が刈谷藩主となったことは興味深い。松平忠房は後に島原藩主となるが、水野氏とはともに徳川の譜代大名として接点があったことになる。推測を重ねることになるが、こうした譜代大名相互の交流のなかで、合戦図が受け継がれた可能性についても、注意を払っておくことにしたい。

3. 「長久手合戦図」が描く戦場の歴史地理

(1) 文字で記された戦い

本図の中心は地図的な表現であるが、図中の描写とは直接かかわらない記述が紙面の各所にみられる。そこで、まずはこれらの内容を確認しておこう。

本図左下(後掲図2のA)には次のような15行にわたる記載があり、小牧・長久手の戦いの発端(織田信雄による家臣の殺害と徳川家康の参戦)について説明している。

A…長久手合戦ノ起ハ、北畠中將信雄卿、令切腹三臣ヲ之故也。天正十二年三月二日、於尾州長島之城、津川玄蕃允(勢州松島城主也)、岡田長門守(岡田助左衛門長子、尾州星崎之城主也)、浅井田宮(尾州荏安賀ノ城主也)、秀吉常ニ懇成故、寵を争、近習讒言シテ逆心ノ由ヲ訴ル故、殺シ玉フ。定テ秀吉ヨリトカメアラントテ、家康公・池田勝入・森武蔵守御頼也。池田ハ信長ノ御厚恩ノ者ナレハ、尤同意ス。森モ家康公モ同意也。然処ニ秀吉ヨリ池田方ヘ津田隼人佐ヲ使ニテ、濃尾三ヶ国領せらるへく候相違有へからさるのよし申来間、勝入心変シテ信雄卿ノ敵ト成ル。武蔵守も心替シテ秀吉ニシヨクシケル。家康公計義ニ随テ変ス。三月十日到于尾州清洲ニ、信雄ヲ御見舞、秀吉当国発向アラハ救ントテ翌日帰国也。

(())は割り書き

「家康公」が「義」にしたがって、織田信雄の側で参戦したという理解は、徳川家の立場を反映した表現である。ただ、島原藩主の父祖・松平家忠が小牧・長久手の戦いに参加したことは、特に言及されていないことを確認しておこう。

また、上記の記載は戦いの発端を記すに過ぎず、その後の経緯については、まとまった記述がない。ただし、特定の地点と関連づけられない上辺の左の記述(図2のD)が、4月9日の長久手の戦いの結末を記している。

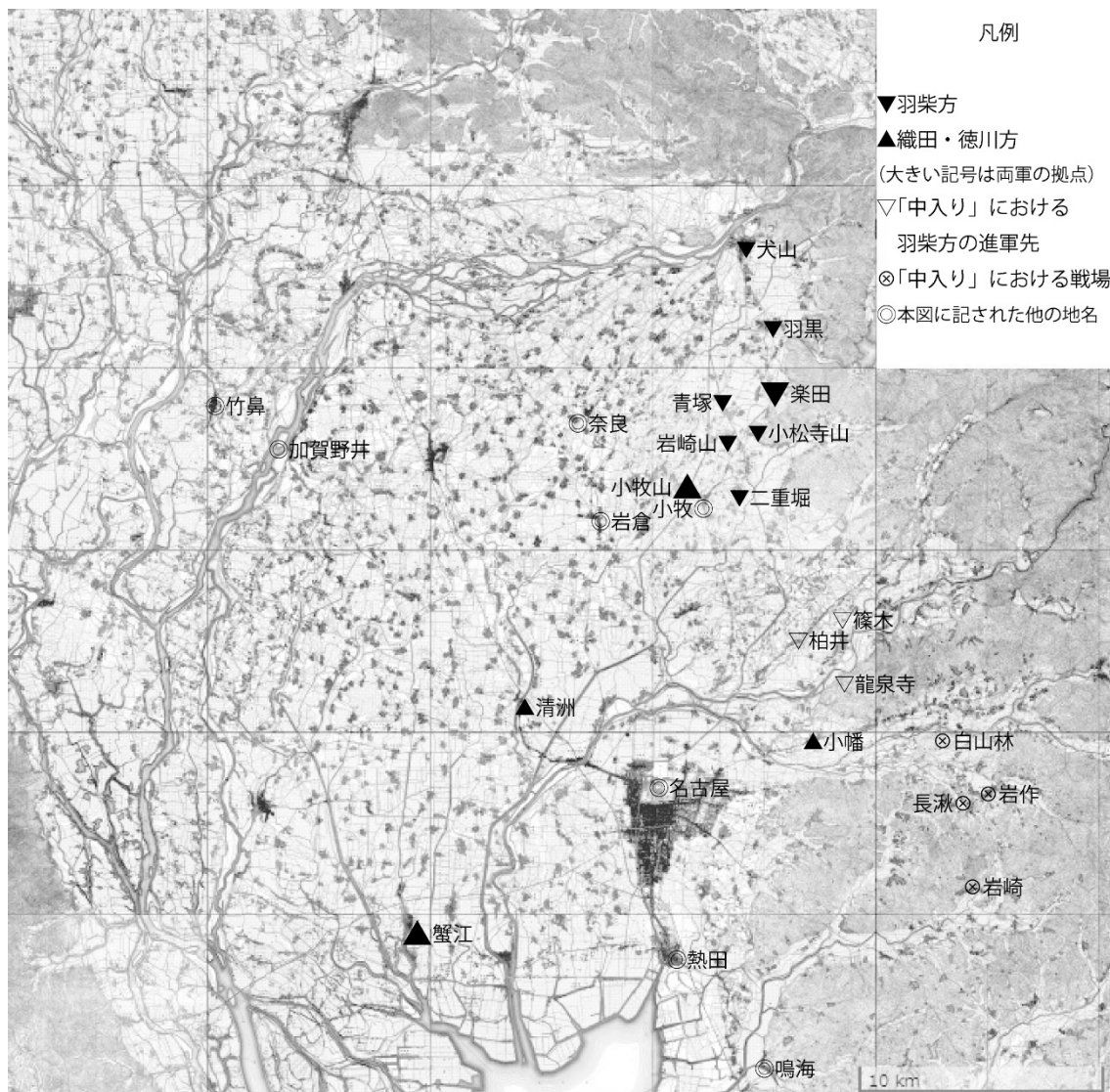


図3 「長久手合戦図」に記された地名

ベースマップは、時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」(谷 2017) により、1888～1898 年の 5 万分の 1 地形図を用いた。

さらにその後、6 月に生じた蟹江合戦に関しても記述 (図 2 の G) があることは、先に触れた通りである。以上の記述は、文字の向きも異なり、内容もスムーズに繋がるものではない。次節で触れるように、各地点に添えられている説明にしても、時系列が明示されていない。そのため、この合戦について予備知識をもたない者にとっては、地図だけから戦いの進展を読みとるのは難しい。このことは、もともと本図が単独で成立したものでなく、小牧・長久手合戦に関するテキスト (合戦記) に付随するものであった可能性をも推測させる。ただし、肥前松平文庫には明確にそれに該当するような資料が見当たらない。

(2) 地図に描かれた戦い

続いて、本図の地図としての表現内容について検討したい。図 2 は地図的な描写や地名をトレースしたものであり、図 3 と比較できるよう、北を上として掲示している。図中の円は

地名を示し、その多くには説明が付されている。とくに、図中央の「青塚」と「ふたへ堀」（二重堀）を繋ぐ二本の線は、両軍の主力が小牧山（織田・徳川軍）と「がくでん」（楽田、羽柴軍）で対峙した際に構築された堀を示し、「此堀秀吉俄ニほる也」との記載がある。

円を結ぶ朱線（図2では点線）は両軍の行軍の経路を示すが、街道や河川の位置を踏まえたものではなく、相対的な位置関係を表すに過ぎない。とはいえ、羽柴方の「中入り」別働隊のルートは、「がくでん」から尾張平野の東端に沿って、「駒辻山」（小松寺山）、「柏井原」，「篠木」，「龍泉寺」，「長久手原」，「岩崎」を経て、三河国の「岡崎」に向かう曲線に表現されている。この曲線の南端（岡崎付近）には「先手池田勝入・庄九郎」，「岩崎」付近に「森武蔵・堀久太郎」，「長久手原」付近に「秀次」との記載がある。また「岩崎」には「池田勝入ト堀久太郎せめ落」，「家康公ノ方，城主丹羽勘助か弟・二郎助討死，三百此城ニ籠，不残打死」とある。これらは別働隊の4月9日朝の状況を表している。

対して織田・徳川方の対応は、「小牧」から「いわくら」（岩倉）、「きよ須」（清洲）を経て、「長久手原」に向かう朱線に表れている。そこに記された次の記述Fは、白山林（本図には記載がないが図3に示す）にいた別働隊の後尾・秀次部隊を、家康が自ら襲撃し、壊滅させたことを示している。

F…小牧より廻ル。家康公・信雄公，御人数秀次ノ御備ニ取付。

その後、先に進んでいた別働隊の先頭（池田恒興・森長可・堀秀政）が長久手（長湫）に引き返してきたものの、岩作（本図には記載がないが図3に示す）で陣を待ち受けた家康に敗れたことは、先述のように記述Dに別記されている。「なかくて」の箇所には、戦いの始まりについて、「武蔵方，山田八右衛門鎧合ス。相手ハ烏井金二郎，平松金二郎」と記されている。その後、「小はた」（小幡）に「小牧勢合戦ニ勝，此所ニ備候」と書き添えられているように、家康はいったん小幡城に軍勢をまとめた。これに対して秀吉は、「龍泉寺」に「秀次敗軍ノ後，秀吉此所へ詰ル」とあるように、別働隊の救援に向かったが、家康は対戦を避け、ひそかに小牧山に帰陣したために、再び小牧において戦線が膠着することになる。

ただし、図2と図3を比べるならば、この「中入り」に関わる地名の位置関係には、齟齬が認められる。すなわち、本図中の「岩崎」と「なかくて」の位置が、ちょうど入れ替わっているようにみえるからである。この錯誤の直接の原因としては、似た地名である「岩崎」と「岩作」（図3参照）を取り違えた可能性が考えられる。つまり本図の作成者は、現地の地理を十分に把握しないまま、岡崎に向けて南進する別働隊の動きを追って戦いが進展したように表現し、別働隊が北に引き返したことをうまく表現できなかった、といえる。

なお、小牧で決着がつかないなか、羽柴方は戦線を拡大し、記述Eが記すように加賀野井城や竹鼻城を奪取した。ただし、E付近の地名には空白が目立ち、また図2中に「※」で記した箇所のように誤写と思われるところがある¹。さらに、本図の南西隅の「かにゑ」（蟹

¹ 図2中の※には「瓦江」と読めそうな文字があるが、比定できる地名を見出すことができない。他の地名が全て縦書きで記されているのに対し、ここのみ2文字が横に並んでおり、誤写の可能性がある。

江)に関わって、先に触れた記述Gに記されているように、秀吉は瀧川一益に蟹江城を攻略させたものの、失敗に終わることになる。「かにゑ」には次のような記載も添えられている。

中入ノ時

明ル年六月十五日夜、瀧川、白子より夜詰入、佐治引入申、伊井兵部小牧よりかけつけ、瀧川退出。同廿七日勢州木作之城ニ退行ける。

ここでは、蟹江城の戦いが小牧・長久手の戦いの翌年であるかのように記され、それを修正するように「中入ノ時」と書き添えられている。本図が写本であるとすれば、原図の誤りを訂正する意図があったようにも受け取れる箇所である。

以上で、本図を通じて小牧・長久手の戦いたどったことになるが、地図としては簡素で錯誤もある本図が、この戦いを描いた合戦図の代表例というわけではない。はじめに触れたように、小牧・長久手合戦に関する古地図はほかにも知られている。そこで最後に、それらとの比較を通じて、本図の性格を位置づけておきたい。

(3)「長久手合戦図」の性格

『長久手町史』(長久手町史編さん委員会 1981)が所収する寛政5(1793)年「尾州愛知郡長久手之邑」絵図と天保11(1840)年「長湫古戦場之図」は、いずれも小牧・長久手の戦いを表した古地図であるが、本図とはかなり異なっている。前者は縦31cm・横314cmが蛇腹に折りたたまれた横長の形態であり、最初に関係地名(村名)の分布を図示した上で、名古屋城下およびその北東の大曾根から、長久手古戦場に至る経路を詳しく描いている。ここでいう長久手古戦場とは、羽柴方の「中入り」の先頭部隊を徳川家康が壊滅させた戦場であり、家康の陣所や諸将戦死の場所(塚)が、村絵図的な筆致のなかに描かれている。主には名古屋から長久手古戦場を訪問する武士、特に尾張藩士のために作成された地図だといえる。

一方、後者の「長湫古戦場之図」は112cm×104cmとほぼ正方形の紙面をもち、長久手村・岩作村の範囲を村絵図的に描く。紙面の外縁部には犬山や小牧、名古屋といった地名もみえるが、地図の中心は家康が「中入り」部隊に勝利した長久手古戦場であり、諸将の移動ルートや陣地を詳細に比定して示している。実際に長久手古戦場を探索する訪問者にとって、具体的でわかりやすい内容だといえる。つまり前者と同様に、長久手古戦場への訪問者を読み手として意識した地図であり、かつ村絵図的な描画を基本としている。

小稿で検討してきた肥前島原松平文庫の「長久手合戦図」が、これらの古地図とはかなり異なっていることは、明白である。すなわち、本図は古戦場への訪問を想定した図ではなく、小牧・長久手の戦いという広範囲に及んだ戦争の推移を理解するためのものである。また、本図が作成された背景には、戦死した父に対する作成者の関心があった。その意味で、武功を記録するための合戦図に近い意義があるといえるが、当該の武士が戦死し、かつ写本として作成されたために、地図としての情報が不十分な状態で伝来したといえることができる。とはいえ、実際に戦争に参加した武士に関わる人々の間で作成され、そして継承されたものであり、戦争の記憶がまだ古びていない世代によって作成された合戦図の一例として理解す

ることができる。父祖が小牧・長久手の戦いに参加した島原藩において写本が伝わったことも、こうした文脈のなかで了解することができるだろう。

4. おわりに

小稿では、肥前島原松平文庫の「長久手合戦図」を検討し、その作成の背景や内容の特徴について検討した。『長久手町史』が収録した合戦図が、古戦場への訪問者を想定して作成されたのとは対照的に、本図は実際に合戦に参加した人物の子が作成したとみられる。そのため、戦争全体の地理的な推移を理解することが主眼となっており、戦いの記憶がまだ古くなっていない世代の合戦図として位置づけられる。ただし地図としての情報は簡潔であり、必ずしも完全ではなく、若干の齟齬も含まれていた。また、実証は困難ではあるものの、本図は徳川家の譜代大名の交流のなかで写本として継承された可能性も考えられ、合戦図の流布や共有のあり方についても示唆を与えてくれる。

ところで、筆者が本図に関心をもったのは、かつて長久手古戦場の近く（愛知県立大学）に職をえて、長久手町民として暮らしたことがあるという私的な経歴にも関わっている。勝利した徳川家と戦死した武将を記憶するために、近世からこの地域が記憶の場所として整えられた事実は、「過去の地理」に対する「歴史／地理的表象」について、筆者が関心をもつきっかけを与えてくれた。本図のように、遠く島原半島においても近世の武士たちが「過去の地理」を共有していたことは、武家社会における古地図の意味について考える上で、幾つものヒントを見出すことができる。今後も機会があれば、検討を深めたい。

肥前島原松平文庫の資料閲覧に際しては、島原図書館（島原市）のお世話になりました。あつくお礼申し上げます。

文献

- 米家泰作（2005）. 歴史と場所—過去認識の歴史地理学—. 史林, 88(1), 126-158.
- 島原市教育委員会・肥前島原松平文庫 編（2018）. 『肥前島原松平文庫調査報告 1 松平文庫目録』島原市教育委員会・肥前島原松平文庫.
- 谷 謙二（2017）. 「今昔マップ旧版地形図タイル画像配信・閲覧サービス」の開発. GIS-理論と応用, 25(1), 1-10.
- 谷口眞子（2006）. 長久手の戦いにみる「記憶のかたち」—戦場長久手を中心に—. 藤田達生編『近世成立期の大規模戦争』岩田書院, 309-336.
- 長久手町史編さん委員会 編（1981）. 『長久手町史 資料編 1 近世村絵図・地図集—村絵図の村・いまむかし—』長久手町役場.
- （1992）. 『長久手町史 資料編 6 中世—長久手合戦資料集—』長久手町役場.
- （2003）. 『長久手町史 本文編』長久手町役場.
- 羽賀祥二（1998）. 『史蹟論—19世紀日本の地域社会と歴史意識—』名古屋大学出版会.